茨木ある記

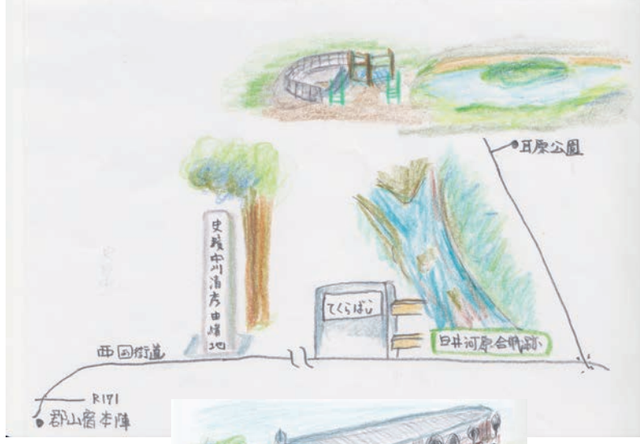
御成門

椿の本陣を訪ねて

茨木市では国や大阪府の支援を受けて、1993年から郡山宿本陣（椿の本陣）の修復に取り組んできました。修復完成を機に、当主である梶家の協力を得て、2001年から一般公開を行っています。

私達、編集ボランティアは、今一度文化財としての「椿の本陣」にスポットをあて、その素晴らしさを再発見しようと、本陣を訪れました。その後、中川清秀由緒地から白井河原合戦跡へと足をのばし、西国街道を散策しました。

上：上段の間
左：大玄関



五色の椿

国史跡 郡山宿本陣（椿の本陣）

旧西国街道は古来奈良時代から重要な道として存在し、京都や奈良から西へ向かうための主要幹線道路の役目を果たしていました。郡山宿は京都、西宮間の街道にある5つの宿場（山崎、芥川、郡山、瀬川、昆陽）のまん中にあり、江戸時代には、西国大名の参勤交代等に利用されました。御成門のそばにあった椿の木が毎年五色の花を咲かせたことから「椿の本陣」とも呼ばれ、国の史跡に指定されています。

享保3年（1718年）に類焼にあい、建物とともにほとんどの古記録が焼けてしまいましたが、享保6年に西国諸大名などの寄付により再建され、母屋、土蔵、茶室、納屋などが再建当時のまま現存しています。

梶 洸さん

これぞ本陣、当主の語りに聞き入る

大名達が出入りした「御成門」をくぐり抜けると石畳の通路があり、正面に大きな「玄関」が控えています。私たちが通された広間の中央には古文書などの資料を収めたガラス張りの展示ケースが置かれ、その端に、本陣の17代当主の梶洸氏が座っておられました。西国街道の歴史から本陣の沿革、本陣にまつわる逸話をまるでドキュメンタリーのナレーターのように、文献を引っ張り出したりレーザーポインターで鴨居に掲げられた資料を指示したりしながら話されました。享保3年の火災の後、再建に向けて本陣にゆかりのある西国大名に合力（寄付）をお願いして回ったこと、忠臣蔵でおなじみの浅野内匠頭長矩が宿泊していたことなど、当主のお話は1時間ほど休みなく続きました。94歳のご高齢の口調とは思えない名調子に時間を忘れるほどでした。

実地に見聞きして知る、驚きの本陣

お話を聞いた後、係の人の案内で本陣のあちらこちらを見て歩きました。城の本丸を見て歩くような気分です。鶯張りだったという廊下、賊の侵入を防ぐような背の高い塀が建てられていたという庭など、当時は物々しい造りだったようです。

主なものをみていくと

「御成門」大名を迎え入れる門

「大玄関」大名を迎え入れる17．5畳の大広間。鶴の壁画が掲げられ、駕籠を置く大床、天井には20本の槍がかかる槍架があります。

「時計の間」　大名宿泊時には本陣の当主が寝ずの番をし、一時（今の２時間）ごとに時を知らせた6畳の間です。

「上段の間」　時計の間の隣にある最も格式の高い部屋です。大名などの主客の休泊に用いられた8畳の間で、他の部屋より一段高くなっています。

このほか、「湯殿」「茶室」「かまや」「駕籠の間」「槍の間」「納屋」「米蔵」などが整い、まさに江戸時代の本陣を今に伝える「文化遺産」そのものです。

本陣の経営と価値

大名が本陣を利用する場合は半年から１年前に本陣側にその旨を伝えます。しかし、これは確約とは言えず、本陣側は結構頭を痛めたようです。大名自身は本陣を利用しますが、お供の者は近隣の旅籠に分宿することになり、その割振りなど、準備は大仕事でした。休泊の３日くらい前になると宿場の出入り口に掲げる「関札」が大名側から届けられます。関札には「五月廿三日脇坂淡路守宿」などと墨書きされています。大名が宿場に到着すると、本陣の主人は裃を着て木刀を腰に差し、関札の建つ所まで出向いて大名を迎えます。

気苦労が多かった割には心付は安く、しかも決まった額を頂戴できるわけではありませんでした。本陣は収入を期待して経営されたというよりは、むしろ名誉ある職としての位置づけだったことがわかります。

江戸時代には全国に２千数百の本陣・脇本陣がありましたが、明治３年、本陣職が廃止されたことにより、その役目を終えてほとんど姿を消しました。現存する本陣は、草津（滋賀県）の田中本陣、信濃追分（長野県）の小川脇本陣、そして本市の郡山宿本陣くらいだと言われています。そのため、郡山宿本陣は非常に希少価値の高い文化遺産であることは疑う余地はありません。

関札

戦国の道をたどって

朝から降り続いていた雨も郡山宿本陣を出るころにはすっかり上がり、私たちは「中川清秀由緒地」と「白井河原合戦跡」をめざし、西国街道を東へ歩くことにしました。

西国街道は交通の盛んな街道で、戦国武将達も頻繁に行き来していたことでしょう。本陣を出ておよそ６００mほど行くと、西国街道と亀岡街道が交差する所に「中川清秀由緒地」があります。清秀は天文１１年（１５４２年）、摂津の国福井村中河原に生まれたとする説があります。

さらに５００mほど東へ行くと「白井河原合戦跡」があります。茨木川をはさんだこの付近一帯を「白井河原」といい、元亀２年（１５７２年）、高槻城主、和田惟政と茨木氏らの連合軍が荒木村重や中川清秀らの属する池田氏勢と摂津の主導権をめぐって合戦をしたところです。池田勢２５００余騎、和田勢５００余騎と多勢に無勢、清秀が惟政を討ちとり、池田軍が勝利をおさめました。「白井河原は名のみにして唐紅の流れとなる」ほど血に染まったそうです。私たちが訪れたとき、幣久良橋から眺める茨木川は雨の後の濁流で土色に染まっていました。この合戦に勝ったことで、中川清秀はこの後茨木城主になります。

白井河原横の耳原公園

中川清秀由緒地の碑